

[A年]受難節第4主日(2021年3月14日)**【旧約聖書日課】出エジプト記24章3～11節**

3モーセは戻って、主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせると、民は皆、声を一つにして答え、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と言った。4モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。5彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。6モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半分を祭壇に振りかけると、7契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うと、8モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」

9モーセはアロン、ナダブ、アビフおよびイスラエルの七十人の長老と一緒に登って行った。10彼らがイスラエルの神を見ると、その御足の下にはサファイアの敷石のような物があり、それはまさに大空のように澄んでいた。11神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばされなかったので、彼らは神を見て、食べ、また飲んだ。

【使徒書日課】ペトロの手紙二1章16～19節

16わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。17荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があつて、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。18わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いて

たのです。19こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意しててください。

【福音書日課】マタイによる福音書17章1～13節

1六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。2イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。3見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。4ペトロが口をはきんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」5ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。6弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。7イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」8彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。

9一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。10彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。11イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。12言っておくが、エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」13そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

出エジプト記 24章3～11節

3さて、モーセは戻って来て、主のすべての言葉とすべての法を民に語り聞かせた。民は皆声を一つにして、「主が語られた言葉をすべて行います」と答えた。4そこで、モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山の麓に祭壇を築き、イスラエルの十二の部族にちなんで十二の石柱を建てた。5さらに、モーセはイスラエルの人々のうちから若者たちを遣わした。彼らは数頭の雄牛を焼き尽くすいけにえと会食のいけにえとして主に献げた。6モーセは血の半分を取って小鉢に入れ、血のもう半分は祭壇に打ちかけた。7そして、その契約の書を取り、民に読み聞かせた。すると彼らは、「主が語られたことをすべて行い、聞き従います」と言った。8そこで、モーセは血を取り、民の上に振りかけて言った。「これは、主がこのすべての言葉に基づいてあなたがたと結ばれる契約の血である。」9さて、モーセは、アロン、ナダブとアビフ、およびイスラエルの七十人の長老と共に登って行って、10イスラエルの神を仰ぎ見た。その足の下にはラピスラズリの敷石のようなものがあり、澄み渡る天空のようであった。11神はイスラエルの人びとの指導者たちを手にはかけなかったので、彼らは神を見つめて、食べ、また飲むことができた。

ペトロの手紙二 1章16～19節

16私たちは、私たちの主イエス・キリストのたと来臨をあなたがたに知らせるのに、巧みな作り話に従ったものではありません。この私たちが、あの方の威光の目撃者だからです。17イエスが父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、次のような声がかかりました。「これは私の愛する子。私の心に適う者。」18私たちは、イエスと共に聖なる山にいたとき、

天からかかったこの声を聞いたのです。19こうして、私たちは、預言の言葉をより確かなものとして持っています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗いところに輝く灯として、この言葉を心に留めておきなさい。

マタイによる福音書 17章1～13節

1六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。2すると、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。3見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。4ペトロが口を挟んでイエスに言った。「主よ、私たちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、ここに幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために。」5ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、雲の中から、「これは私の愛する子、私の心に適う者。これに聞け」という声がした。6弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。7イエスは近寄り、彼らに手を触れて言われた。「立ち上がりなさい。恐れることはない。」8彼らが目を上げて見ると、イエスのほかに誰もいなかった。

9一同が山を下っているとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことを誰にも話してはならない」と弟子たちに命じられた。10彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。11イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを建て直す。12言うておくが、エリヤはすでに来たのだ。しかし、人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、同じように人々から苦しめられることになる。」13その時、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・3月14日「受難節第4主日」の日課主題は「主の変容」。主イエスが三人の弟子たちを伴って高い山に登られ白く輝く姿を見せられたという「主の変容」の出来事を伝える聖書箇所は、伝統的に受難節中の主日日課の中に配されてきた（現在、伝統的教派が用いている改訂共通聖書日課では、受難節第2主日に固定）。この場面は、共観福音書において、直前に置かれた「ペトロの信仰告白と主の受難予告および随従の呼びかけ」と密接に結びつけられており、一連の「受難予告伝承」として保存されてきたと考えられる。

・旧約日課および使徒書日課は、この「主の変容」と関連する箇所が設定されている。

旧約日課(出エジプト24章より)

・「出エジプト記」は、旧約正典中「律法(トーラー)」の第二巻として置かれている文書で、続く「レビ記」「民数記」と共に「モーセの出エジプト物語」を構成している。「申命記」は、これら三書の物語を踏まえて、モーセが教えを再確認して語った体裁となっている。

・「出エジプト記」の全体構成は、「序文」(1章)、「モーセ誕生物語」(1~2章)、「モーセ召命物語」(3~6章)、「出エジプト物語」(7~18章)、「シナイ契約～律法授与と金の雄牛事件」(19~24章、32~34章)、「幕屋建設伝承」(25~31章、35~40章)。日課箇所は、「シナイ契約」における「契約締結式」の場面である。

・「シナイ契約」は、モーセがエジプトから導き出した民と共にシナイ山に赴き、民を麓に残したまま山に登って神と会見し(19章)、そこで神から「十戒(←言葉(ダーバール))」(20章)および「法(ミシュパト)」(21~23章)を授与され、これらを「契約の書」として締結した契約を指す(24章)。日課箇所は、民および長老たちを集めておこなわれた「契約締結式」の場面として描かれている。儀式は二部に分かれており、第一部では、まず民に対して「主の言葉」と「法」が告知され、民は遵守を誓約する。次に、告知された「主の言葉」と「法」が「契約の書」として記され、再度朗読されると、民は再び遵守を誓約する。第二部は、モーセと民の代表である長老たちが山に登り、神の御前で会食をする(つまり、食事を共にすることができる信頼関係に入った!)ことで、契約の成立を確認する。この会食儀式は、第一部で「和解の献げ物」として準備されたもので、祭儀規定が「レビ記」3章にある。おそらく、一般的な人間同士の契約締結に際して行われていた会食が元になった儀式である。

・モーセは、「契約締結式」第二部で、「アロン、ナダブ、アビフおよび…七十人の長老」を山に同行させている。「アロン」はモーセの従兄で共同指導者、「ナダブ」と「アビフ」はアロンの息子たちで、主の指示に基づいた指名(24:1)。アロン一族は「祭司」に任じられる家系であるが、ナダブとアビフは、早くもシナイの荒

れ野時代に規定に反した祭儀を執行して自らの死を招いたとされている。とは言え、モーセが三人(そのうち二人は兄弟)を伴って山に登ったという記述は、新約福音書で主イエスが三人の弟子(そのうち二人は兄弟)を伴って「高い山」の登られたという伝承形成に間違いなく影響を与えていると考えられる。

使徒書日課(Ⅱペトロ1章より)

・「ペトロの手紙二」は、「手紙一」と共に使徒ペトロの名によって記され、初期教会で受け入れられた書簡形式の文書で、いわゆる「共同書簡」の一つに分類される。新約学者らは、この書簡(手紙二)の成立を二世紀と見ている場合が多いが、それは、一世紀後半の混乱したユダヤ社会の状況よりも、二世紀に入り組織としても安定化した教会の日常が「偽教師」の問題や「訪れない終末の再臨」の問題などに限定されていた状況を反映していると考えられるからである。この書簡の中には、すでに「使徒パウロの書簡」が広く教会間で流布し、重要な教会文書としての地位を得始めていた様子を示唆する記述もある(3:15)。

・日課箇所、著者(と名乗る)「使徒であるシメオン・ペトロ」(1:1)は、かつて主イエスに同行して自ら体験した「山上における主の変容」の出来事を証して語り記している。この書簡の真筆性(ペトロ本人に帰することができるかという問題)に疑義を呈する新約学者は、ここに記された証しを、共観福音書の記述に基づく二次創作であると見る場合があるが、共観福音書伝承自体がペトロ当人の証言にもっぱら依拠しており、偽作性を立証することにはならない。むしろこの箇所は、2世紀ごろまでの初期教会が、「福音書」も含めて、客観的な「イエスの証言や事績」を記録し伝えることよりも、「使徒的伝承(使徒たちの証言)」を重視していたことを示す記述であると見ることもできるだろう。

・この箇所は、福音書の伝える「主の変容」伝承をどのように解釈し受け取るべきかの、一つの規範となっている。すなわち、「主の変容」の出来事は、ペトロら使徒たちが「預言の言葉」=「旧約聖書」に対する信頼を確固たるものにする出来事であった、という解釈であり、それはつまり、主イエスの教えや解釈を通して「旧約聖書」を理解することがキリスト者の基本的な聖書観なのだということを意味している。

福音書日課(マタイ17章より)

・日課箇所は、共観福音書で共通する「主の変容」の出来事を伝える箇所。場面設定は、「出エジプト記」でモーセがアロン、ナダブ、アビフと長老たちを連れてシナイ山に登った「契約締結式」の状況を敷衍したものとなっている。この場面描写の中でペトロが「仮小屋(幕屋)」を建てることを申し出ているが、これは、「出エジプト記」24章の「契約締結式」箇所は、続く25章以下で「幕屋建設の指示」が詳細に記されており、「山上の契約締結」→「幕屋建設」という一連の流

れを踏まえたものであろう。なお、「エリヤ」についても、「列王記上」19章によれば、一時的に「ホレブ山(=シナイ山)」に逃れて神の新たな召命を示されるという出来事が伝えられている。

・共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)の比較から見たとき、「マタイ福音書」がこの場面描写を独自の視点で修正加筆しているのが6~7節。6節「弟子たちは…非常に恐れた」は、「マルコ」および「ルカ」が主イエスの姿が変わりモーセおよびエリヤと語り合っているという不思議な状況に対して弟子たちが恐れたとしているのに対して、「マタイ」は、「これはわたしの愛する子」という声が聞こえたことに対して恐れたとしている。そして、さらに「マタイ」は、この声を恐れてひれ伏した弟子たちに対して、「主イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。『起きなさい。恐れることはない』」(7節)という独自の描写を加筆している。「マタイ」は、おそらく、この天からの声を主イエス自身の「洗礼」の出来事の際に天から響いたとされる声と明確に結び付け、主イエスが弟子たちに手を触れて起き上がらせるという動作を弟子たちへの「洗礼授与」を象徴的に示すものとして記しているのである。この「起きなさい(エゲルテューテ←エゲイロー)」は、直前16章の「受難予告の中で「復活する」(16:21)とある表現と同じ語であり、初代教会はすでに、洗礼において「キリストと共に死に、共に復活する」と理解していた(ロマ 6:3~4)。

・「主の変容」場面後半(9節以下)には、「マタイ」が「マルコ」や「ルカ」が描いていないもう一つの加筆がある。13節の記述で、「エリヤ=洗礼者ヨハネ」論に対する主イエスの解釈を弟子たちが理解したとされている。「マタイ」は、「エリヤ=洗礼者ヨハネ」論を明示することを意図したのであろう。すると、「洗礼者ヨハネ」と同じ宣教の言葉「悔い改めよ。天の国は近づいた」によって宣教を始めたと明確に「マタイ」が描く「主イエス」には、「エリヤ」の後継者「エリシャ」と重ね合わせられた側面があると見ることもできる(エリシャは、北王国イスラエルの王権交代に関与し、「イスラエルを建て直した」預言者として知られる)。もちろん、「マラキ書」が預言する「終わりの主の日に先立って来臨するエリヤ」というイメージも含まれているのだろう。

来週の誕生日 (3月14日~20日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-285番「高き山の上」(=Ⅱ44番)は、15世紀英国のセーラム典礼聖務日課書に「イエスの変貌の祝日」のための聖歌として収められたラテン語聖歌。曲は、18世紀フランスで発行された聖歌集から。
- ・21-509番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966年夏の異常な猛暑の中で着想された。

・21-291番「み神の座を捨て」は、4世紀シリアのエフラムが作詞したシリア語聖歌集が原作で、米国の神学教授ライズが英訳したものの中からタッカーが讃美歌用に歌詞を整え、1982年出版の讃美歌集に収録。曲は、ロンドン生まれで米国で広く活躍した音楽家アーナットによる。

21-285「高き山の上」

O Wondrous Type (O Wondrous Sight)

1. O wondrous type! O vision fair / Of glory that the Church shall share, / Which Christ upon the mountain shows / Where brighter than the sun He glows!
2. From age to age the tale declare / How with the three disciples there, / Where Moses and Elias meet, / The Lord holds converse high and sweet.
3. With shining face and bright array, / Christ deigns to manifest to-day / What glory shall be theirs above / Who joy in God with perfect love.
4. And faithful hearts are raised on high / By this great vision's mystery; / For which in joyful strains we raise / The voice of prayer, the hymn of praise.
5. O Father, with the eternal Son, / And Holy Spirit, ever One, / Vouchsafe to bring us by Thy grace / To see Thy glory face to face. / Amen.

21-509「光の子になるため」

I want to walk as a child of the light

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus. / God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.

Refrain

- In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.
2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus. / Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.
 3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus. / When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.

21-291「み神の座を捨て」

From God Christ's deity came forth

1. From God Christ's deity came forth, / his manhood from humanity; / his priesthood from Melchizedek, / his royalty from David's tree: / praised be his Oneness.
2. He joined with guests at wedding feast, / yet in the wilderness did fast; / he taught within the temple's gates; / his people saw him die at last: / praised be his teaching.
3. The dissolute he did not scorn, / nor turn from those who were in sin; / he for the righteous did rejoice / but bade the fallen to come in: / praised be his mercy.
4. He did not disregard the sick; / to simple ones his word was given; / and he descended to the earth / and, his work done, went up to heaven: / praised be his coming.
5. Who then, my Lord, compares to you? / The Watcher slept, the Great was small, / the Pure baptized, the Life who died, / the King abased to honor all: / praised be your glory.